

2011年5月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

ただ一つの真理

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「説法品」

1. 説法品の構成

(1) 大莊嚴菩薩の第一の質問

わたくしども菩薩がまわり道をしないでまっすぐに仏の境地へたつするためにはどんな修行をしたらよろしいのでしょうか。

(2) 釈迦牟尼世尊の答え

無量義という教えを修行すれば、まっすぐ仏の境地に達することができます。

無量義（数かぎりない千差万別の教え）は、ただ一つの真理から出てくるのです。

2. 性・相・空・寂

(1) 性

「性」とは、ものごとの性質です。ものごとの属性のなかで、どのような条件に触れても、容易に変わらないものを「性」と言います。

現象上の性質は、変わりにくいけれども、まったく変わらないわけではありません。

決して変わらない性質は、あらゆる人が持っている「仏の性質（仏性）」です。

(2) 相

「相」とは、ものごとの性質が表に現れたすがたです。「性」と「相」は表裏一体です。このため「性」にふさわしい「相」が現れますから、「相」を見極めれば「性」が分かります。

「性」が変化すれば、「相」も変化します。

(3) 空

ものごとが縁起の法則によって存在していることを「空」と言います。

この世に「絶対的存在」というものはありません。また、「すべてのものごとの根源の存在」というものはありません。

すべてのものごとは、その本質においては平等です。

(4) 寂

大調和した状態です。

すべてのものが生々発展しながらも大きく調和している、はつらつとした理想の状態です。

部分的には調和の乱れた状態が現れることがありますが、それも含んだ全体は、調和が乱れることはありません。

3. 人生苦の根本原因

(1) 真理を知らない

真理を学んだことがない。

学んだけれども知識として覚えているだけで実践に結びつかない。

学んだけれども、実際の場面では忘れてたり無視したりする。

(2) 目の前にあらわれた現象だけを見る

五感でとらえた現象だけで、自分自身の認識を作り、判断をしてしまう。

(3) これは得だ、これは損だなどと勝手な計算をする

自分の認識と判断のなかだけで、自分本位の計算をする。

(4) 不善の心を起こし、さまざまな悪い行為をする。

「不善の心」とは真理から外れている心。「悪い行為」とは真理から外れた行為。

自分の中であって、自分を真理から遠ざけるようにはたらくものを、煩惱といいます。

自分が真理を歩こうとすると、真理を歩ませまいとする心の動きが自分の中から出てきます。

自分が真理に合った生き方をしようとする、真理を忘れさせよう、自分本位の道を歩かせようとする心の動きが、自分の中から出てきます。

(5) そのために、さまざまな苦しみを受ける。

「さまざまな苦しみ」は、経文では「六趣に輪廻し」となっています。「六趣」は「六道」であり、「地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界」のことです。

(6) いつまでたっても、その誤った境界から抜け出ることができない。

真理を知らず、正しい実践ができないから、六趣（さまざまな苦しみの状態）から抜け出すことができません。また、自分が六趣を輪廻していることに気づくこともできません。

4. 人間を救う菩薩としての根本的な心がまえ

(1) 菩薩が見極めるべきこと

① 「すべてのものごとは性相空寂である」という真理を見極める。

② 真理を知らない人々が、そのために苦しんでいることを見極める。

(2) 衆生に対するあわれみの心

真理を知って菩薩のはたらきをしている人が、真理を知らないでいつまでも苦しんでいる人びとのすがたを見たら、可哀相だという気持ちが、心の底から生じます。

(3) 人びとを苦しみから完全に救い出してあげようという決心

「完全に救い出す」ことが大切です。

二度と迷いの世界に落ち込まないように、二度と真理の道から外れることがないように、完全な智慧を持ち完全に実践できるようになってもらうのです。

(4) 実相を見極める修行

人びとを完全に救うためには、実相を見極める「智慧」、真理に合った行動をする「行動力」が必要です。

(5) 実相に基づく救いの活動

人に応じ場合に応じて、千差万別の教えを説くことになります。

5. 千差万別の教え

(1) おおくの人びとの機根や、性質や、欲望の相をしっかり観察しなければなりません。

① 機根

真理の教えを聞いて理解し修行できる能力のこと。

② 性質

どのような環境に置かれても変わらないで持っているもの。

現象上の性質は、まったく変わらないわけではありません。適切な条件に触れることができれば、よりよい性質へと変わっていくことができます。

③ 欲望

欲求、希望、願望、意欲など。

(2) 人びとの機根も、性質も、欲望も千差万別ですから、それぞれの人に説く教えも、当然千差万別にならざるをえません。

6. 無量義は一法より生ず

(1) 千差万別の教えの根っこは一つの真理でなければなりません。真理にもとづく教えだけが、人びとを根本的に救う力があるのです。

(2) 真理でないところから出てきた教えは、目先、小手先の手当てはできても、本当の意味で人を救う力はありません。

7. 無相・不相・実相

(1) 「無相」とは、「相が無い」ということではありません。「特定の相が無い」ということです。「特定の相」とは、「いつまでたっても変わらない相」ということです。

あらゆるものごとは、条件によって変化し続けますから、「相」はどんどん変化していきます。このことを「無相」と言っています。

(2) ものごととものごとの間には、相の違いがあります。これをここでは「差別」と言っています。ものごとは「無相」で「特定の相」がありませんから、「特定の差別」を作るといったようなこともありません。このことを「不相」と言っています。

(3) あらゆるものごとには「特定の相が無い（無相）」のであり、「特定の差別をつくらない（不
相）」のでありますから、あらゆるものごとは「平等」だということになります。

これが「ものごとの本当のすがた（実相）」であるということです。

(4) 現象上の相や現象上の差別はあります。現象上の相や差別は、どんどん変化していきます。そ
の変化は、ただ一つの真理によって生じます。

そこで私たちは、ただ一つの真理を深く理解し、現象をよく見極めて、真理に合った行いをす
れば、人間の真の生き方を体得して、人を救いつつ充実した人生を歩めるようになります。